香取遺産 vol.144

―さらなる二百年先へ―
「佐原の山車行事」保存・伝承

①彫物を付けずに木目を披露しての曳き廻し ②美しい木目の中天井（ちゅうてんじょう）　斜めの補強材が見える

平成30年5月3日、荒久区山車新造竣工式が執り行われました。新しい山車には、大天井に五色の幡、左右に鶴と亀を飾り、四方には玄武、青龍、朱雀、白虎の四神を配しています。祭礼時とは異なったあつらえです。山車の前には、祭壇が設けられ、八坂神社宮司による祝詞奏上や参列者による榊奉納などが厳かに執り行われました。式の後、野田芸座連が祝砂切（いわいさんぎり）を演奏し、お披露目の曳き廻しへと出発しました。

荒久区の旧山車は、昭和3年の建造で、約90年が経ちます。長年の使用により、部材のひび割れや変形が激しくなり、山車行事の伝承に支障をきたすと考えられました。そこで、町内では山車新造について議論がなされました。

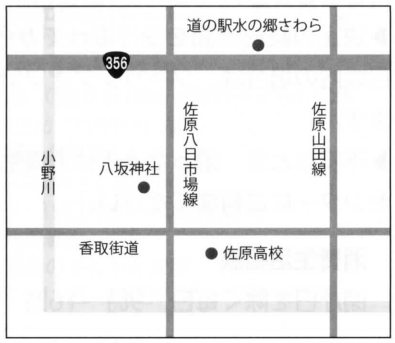
国の重要無形民俗文化財である「佐原の山車行事」は、重要な用具である山車本体をはじめ、大人形や天幕、彫刻などの懸装品（けんそうひん）の保存・修理について、学識経験者からなる佐原山車行事伝承保存会評議委員会に諮問（しもん）をし、文化財としてふさわしい計画となるよう審議が行われます。

平成28年に区の代表者から山車本体の新造計画案の提出を受け、佐原山車行事伝承保存会は評議委員会に諮問をしました。審議に先立ち、山車の現状を調査すると、欅（けやき）の良材を用い、無節で木目の整った材を多用していることが分かりました。特に、六本ある柱の内、正面の二本は四方柾（しほうまさ）とよばれるもので、四面とも正目（まさめ）となるよう贅沢な木取りをしています。また、先代の山車から一部の材を転用していること、仕口（しぐち）なども優れた細工が施されていることも分かりました。この調査を踏まえ、解体修理とする案も提示されました。評議委員会、区とも会議を重ねた結果、新造とする計画が決定しました。新造計画では、若干の補強材の追加などのほかは、これまでの山車を踏襲するものです。

今回の荒久区保有山車新造は、その経緯や旧山車の調査結果、新山車の設計図を後世の保存・修理に備え、記録保存をします。このように、文化財に係る保存・修理・新調は、幾多の段階を経て慎重に実施されます。

今月の祇園祭では、新しい荒久区の山車も、懸装品を飾り曳き廻されます。さらなる二百年先へ、山車行事を保存・伝承するという荒久区の強い思いが伝わることでしょう。

問 生涯学習課 ☎(50)1224



佐原の大祭夏祭りエリア